



宮司プレス 第百七十三号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和三年七月十四日

◇宮司の柴田です。 史上二番目に早い梅雨

入りでありましたが、このところ、梅雨の晴れ間が続いていましたが、昨日、梅雨明けが発表され、いよいよ夏本番を迎えます。 七月の異称(いししょう)は、文月(ふみづき)です。 この文月には、諸説(しよせつ)あるようですが、その一つに、「七夕(たなばた)に願(ねが)い事(こと)や短歌(たんか)を短冊(たんざく)に書いた」ことから、文をしたためる月になったという説(せつ)があります。 先月の三十日から、今月の七日(なな)まで、「夏詣(なつもうで)」と、銘打(めいうち)めいう(い)う)って、手水舎(てみずしや)を、お花を浮(う)かべた「花手水(はなてみず)」にさせていただきました。 その手水舎に、風鈴(ふうりん)を取り付けました。 夏の強い日差(ひざし)し、蒸(む)し暑い折節(おひふし)、時折吹く風(かぜ)に、「リン リーン」という風鈴(ふうりん)の音(ね)は、実に爽(さわ)やかです。 その風鈴(ふうりん)に、文月(ぶんげつ)にあやかり、一日(いちにち)も早い「コロナ禍(コロナ)の終息(しゅうせき)を願(ねが)う文(ぶん)をしたためた短冊(たんざく)を吊(つ)り下げました。 したためましたのは、まず、宮司(みやじ)プレス第百七十号(だいひゃくしちごう)で力説(りきせつ)り

きせつ)した、「悲観(ひきかん)は気分(きふん) 樂觀(りつかん)は意志(いし)」。 さらに、最近(さいきん)、水茎(みずくき)の跡(あと)が、麗(うるわ)しくなく無謀(むぼう)と知りつつ色紙(いろは)にしたためる、いわゆる、マイブーム(まいぶーむ)となりつつある、「至誠善行致祥(しじょうぜんぎょうしちやう)」。 そして、昨(きの)年から(から)の敬神生活(けいじんせいかつ)キャンペーン(きゃんぺーん)のキャッチフレーズ(きゃっちふれーず)、「四K(よっぴ)プラスROY(らよー)など、欲張(よくば)ってしたためました。

◇さて、西洋文明(せいやうぶんめい)の特徴(とくちょう)として、よく語(かた)られるのが、はじめに言葉(ことば)があった(あ)ったという(いう)ことです。 「言葉(ことば)は、神(かみ)と共にあ(あ)った、言葉(ことば)は神(かみ)だった」というキリスト教(きりすとけう)の聖書(せいしょ)の言葉(ことば)が、西洋(せいやう)の考(かんが)え方を代弁(だいべん)「だいべん)して(して)いる(いる)と言(い)われる(われる)から(から)だ(だ)そう(そう)です。

それに反(か)して、日本人(にほんじん)は、言葉(ことば)でなく形(かたち)で自ら(みづか)ら表現(ひょうげん)して(して)きた(きた)のであり(のであり)まして、形(かたち)をまね(まね)る(る)が、学(まな)ぶ事(こと)として捉(とら)えて(と)きました。 人(ひと)の心(こころ)は目(め)に見(み)えませ(ませ)んが、その見(み)えない心(こころ)を形(かたち)にした(した)のが、じつは、言葉(ことば)なの(なの)です。 私(わたし)供(たまご)神職(かみ)は、日(ひ)毎(まい)、月(つき)毎(まい)季節(きせつ)毎(まい)の祭典(まつり)には、神様(かみさま)へ祝詞(いのり)の(の)りと

を奏上(そうじやう)する(する)のですが、これ

は、まさしく、心の祈りを形にした言霊(ことだま)です。

◇私は、常々、「三そう」を大切にしています。 一つは、服装(ふくそう)です。 清潔(せいせつ)な白衣(はくわい)と袴(はかま)、祭典(まつり)には定め(さだ)められた装束(しょうぞく) (しょうぞく)を着装(ちやくそう)する(する)ということ(こと)です。 二つめは、人相(にんそう)、明るい笑顔(えんご)のこと(こと)です。 そして、三つめは、これが、一番(いちばん)大切(たいせつ)な(な)のですが、情操(じやうそう)、心(こころ)な(な)のです。 心(こころ)が、乱(みだ)れば、服装(ふくそう)や身(み)だし(だし)なみ、表情(へいじょう)や言葉(ことば)にも少(すく)な(な)から(から)ず影(かげ)響(きやう)を及(およ)ぼ(ぼ)します。

◇「心(こころ)は形(かたち)をもとめ(もとめ)形(かたち)は心(こころ)をす(す)すめる」という言葉(ことば)がある(ある)のですが、これ(これ)は、仏教(ぶつけう)の教(きょう)えです。 信仰(しんぎやう)は仏像(ぶつざう)を必要(ひつやう)とし、仏像(ぶつざう)は信仰(しんぎやう)をす(す)すめる、仏像(ぶつざう)は形(かたち)だけ(だけ)、その仏像(ぶつざう)を拜(たま)むこと(こと)で信仰(しんぎやう)心(こころ)が高(たか)まっていく(いく)という教(きょう)え(え)な(な)のです。 これ(これ)を私共(わがら)の日々(ひび)の暮(くれ)らし(らし)に置(お)き換(か)えて(えて)みますと、形(かたち)という目(め)標(ひょう)が必(ひつ)要(やう)で、その目(め)標(ひょう)達成(たっせい)の過程(ていせいの)にお(お)いて、窮地(きゆうち)に立(た)たされ(され)ても、希望(きぼう)を(を)持ち(も)ち続(つ)け(け)ながら突(つ)き進(すす)む強(つよ)さ、すなわ(すなわ)ち、心(こころ)が必(ひつ)要(やう)不可(ふか)欠(け)な(な)のです。

◇コロナ禍(コロナ)に遭(あ)い遇(ぐ)して(して)いる私共(わがら)、東京(とうきょう)では四度目(よっぺ)の緊急事(きんきゅうじ)態(たい)宣(せん)言(げん)が延(の)び(び)長(なが)され(され)、その宣(せん)言(げん)のさ(さ)な(な)か(か)で、五輪(ごりん)が開(ひら)催(さい)され(され)ます。 感(かん)染(せん)症(せい)を封(ふう)じ込(こ)める(める)ために、正(ただ)常(じょう)な(な)あ(あ)たり(たり)ま

えの日常生活が制約されるといふ、トレードオフ（相反（あいはん）する関係）に、これからも悩まされ続けます。十年単位で進むはずの社会の構造改革が、コロナ禍で一年に圧縮されて進んでいるようにも感じられます。朗報は、ワクチン接種のスタートで大きく後（おく）れをとりましたが、開始後のスピードでは、ほとんどの国をしのいでいることです。終息（しゆうそく）という、長い暗いトンネルの出口もあと少しなのではないでしょうか。

◇人の心の幸せに必要なものが、三つあるそうです。一つは言葉、もう一つは誠心誠意（せいしんせい）の態度と笑顔、最後は心だそうです。やはり、「三そう」と、「心は形をもとめ形は心をすすめる」という目標達成の心意気が大切なのです。そのためにも、「おこるな、いばるな、あせるな、くさるな、まけるな」、「おいあくま」の心がけで、このコロナ禍の夏を乗り切りたいものです。御自愛ください。

◇七月の祭典行事予定（報告も含む）

▼月次祭 *七月一日、十五日

▼貴布祢神社、貴布祢稻荷神社月次祭

*七月一日

▼七社祭 *七月九日

※六連島に鎮座（ちんざ）する七社（西海

大明神・恵比寿神社・大歳神社・宗像神社・峯像神社・貴布祢神社・恵比寿神社

の例祭を六連島八幡宮拝殿において斎行（さいこう）するお祭りです。各神社の世話役の方は、お供え物と新しい注連縄（しめなわ）を持参されます。祭壇（さいだん）に注連縄を飾り、竹に新しい御幣（ごへい）と、「オキヌ」という「人形（ひとがた）」を差し込み、お供え物を並べて、各社を遥拝（ようはい）、遥（はる）かに拝（はい）して、お祭りを行います。お供え物は、世話役の家に代々伝わるもので、様々（さまざま）です。祭典が終了したら、島に点在するそれぞれのお世話される、神社の注連縄（しめなわ）とオキヌをかえます。「オキヌ替（が）え」と呼ばれる神事です。最近では、境内社（けいだいしゃ）である荒神社（こうじんしゃ）も加わり八社となりました。



▼竹の子島天満宮例祭 *七月十五日

▼朝粥会 *七月二十一日
▼夏越祭

■六連島八幡宮 *七月二十五日

■田の首八幡宮 *七月二十七日

■彦島八幡宮

※前夜祭 *七月二十九日

※御神幸祭 *七月三十日

■恵美須神社 *七月三十一日

▼花手水を行います

■夏詣七夕花手水 *七月七日まで

■夏越花手水 *七月二十二日～三十日

◇七月の宮司動静予定（報告も含む）

▼彦島八幡宮関係団体

□敬神婦人会境内清掃奉仕作業

*七月二十五日

□奉賛会茅の輪奉製奉仕作業

*七月二十七日

▼山口県神社庁、同下関支部

□神社庁役員会 *七月八日

□山口県神社庁支部長事務局長会議、教

化部代表者会議 *七月九日

□下関神社総代会役員会 *七月二十一日

▼教誨活動 ※美祢社会復帰促進センター

□集合教誨（男子） *七月十二日

□集合教誨（女子） *七月二十六日

▼その他

□迫町自治会役員会 *七月二十一日